

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02435

研究課題名(和文) 明治大正期の古鈔本の“発見”影印と羅振玉の古鈔本“発見”についての基礎的研究

研究課題名(英文) A fundamental study on the "discovery" imprint of old fashimi in the Meiji Era  
Taisho era and the discovery of the old manuscript of Luo Shimbu

研究代表者

道坂 昭廣 (MICHISAKA, AKIHIRO)

京都大学・人間・環境学研究科・教授

研究者番号：20209795

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は明治から大正時期に相次いだ古写本の発見を、所蔵の発見とテキストとしての価値の発見の二つに分けて考察を行った。前者については、当初博物館など公的機関がその発見を主導したのに対し、後半期はオークションなどを通し個人が発見するようになるという変化を明らかにした。また、前半期のこれら古写本の影印は鑑賞を目的としたものであったが、次第に中国学におけるテキストとしての価値が認知されて行くことを、『王勃集』の発見を例として論証した。本研究では、明治末から大正時期の日本伝存書の影印とそれらに対する書誌学研究を象徴する人物として羅振玉に注目し、彼の徳富蘇峰の蔵書の影印の経緯について考察を加えた。

研究成果の概要(英文)：About the discovery of manuscripts in the end of the 19th to the beginning of the 20th century, I have divided into two, discovery of manuscripts and discovery of value as text. In the first period, public institution led the discovery, while revealing the change that individuals will discover through the auction during the second half. The photolithoprint of manuscripts in the first half was for appreciation of characters, but I proved "WANG-Bo ji(王勃集)" as an example in the value as the text in the Sinology being gradually recognized. In this study, I focused on LUO Zhenyu(羅振玉) as the person who symbolized the photolithoprint of manuscripts in Japan and the bibliography study for them in the beginning of the 20th century. I discovered letters from LUO to TOKUTOMI Soho(徳富蘇峰), these letters request Soho for loan and reproduction of his collection of books, I insisted that letters proved his academic activite in Japan.

研究分野：中国文学

キーワード：古写本 羅振玉 影印 王勃集

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は終了した科研「日本伝存文献を用いた『全唐文』補訂の可能性についての研究」(基盤研究(C))で発見された問題を追求するために計画された。

多くの中国典籍の古写本・古刻本が日本において保存されてきたことは良く知られている。また現在ではそのテキストとしての価値も国内外の学界において広く認知されている。これら古写本古刻本の多くは、明治以降に発見された。もちろん早くよりその存在が知られていた古写本類もあるが、実際にそれを見ることは困難であった。明治に入ってこれら多くの中国典籍の古写本や古刻本が発見され、所在が確認されたのは、博物局による 壬申検査 や、印刷局による 巡回調査 といった公的機関による調査による。そして楊守敬による模刻よりさらに精密な石印で、また後にはコロタイプといった当時最新の影印方法によって複製が作られた。このように影印によって古写本類が容易に見ることが出来るようになったことにより、現在に至る近代的なテキスト研究が、はじまったのである。ところが、先の科研の調査によって、このような明治から大正時期における中国典籍の発見、影印の経緯があまり分明的になっていないことがわかった。

現在では自明のこととなっているこれら古鈔本古刻本のテキストとしての価値は、森立之等によって編纂された『経籍訪古誌』、更に楊守敬『日本訪書誌』によって広く日中の研究者に紹介された。しかしその後さらに多くの古写本類が発見され、それらを敦煌文書に対する態度と同様の態度をもって調査した羅振玉の研究は、この時期の日本古写本古刻本に対する研究のエポックをなすものと思われた。特に1911年から19年までの日本滞在時期、彼は研究とともに影印刊行にも力を入れた。ただ、彼のこのような調査と研究は影印書に附された跋文などの形式で示されていることも多く、十分な整理が為されていなかった。幅広い学術活動のなかで、日本古鈔本古刻本に対する羅振玉の功績は、未だ十分に研究がなされていないように感じられたのである。

中国においても所謂「域外」漢籍に対する関心が高まっている。このような時期にあつて、日本に伝存する中国典籍の古い形態を伝える古写本古刻本の発見期とも言える明治から大正の、調査や研究状況を整理する必要が痛感されたのである。

### 2. 研究の目的

本研究において解明しようとしたのは2つの“発見”である。1は、日本に伝わった古写本の発見である。これは古写本がどのようにして所在が確認され、影印によって江湖に広く認知されるようになったかという典籍そのものの“発見”である。次にそれら影印本によって研究が容易になり、校勘などを通

して、その写本の意義が解明されたこと、即ちテキストとして価値の発見を第2の“発見”とし、その研究の状況を解明することを目的とした。

明治の前半期、第1の発見は、博物局と印刷局という公的機関による調査によってなされた。その調査に加えて江戸時代の書誌学研究者の掉尾と称することができる森立之等の協力を得た楊守敬の古写本古刻本の集書及び調査が、この時期の第2の発見の代表的なものとなる。この時期については、楊守敬の活動が注目されがちであるが、本研究ではむしろ第1の発見について、資料を整理しようとした。

続く明治後半から大正時期においては、第1の発見を担う者が、公的機関から学者や茶道を趣味とする財界人といった民間に移る。古写本の発見は、オークションをはじめとする典籍の流動によって生じた。また、影印の目的も、前期が書跡としての関心が第一義であったのに対し、この時期にはテキストとしての関心、即ち書誌学的関心によるものが多くなる。この時期における第2の発見については、同時期に発見された敦煌文書との関わりが意識されなければならない。その意味でこの時期の第1の発見、第2の発見の両方に関わる羅振玉に注目しなければならないと考えた。羅振玉と内藤湖南を始めとする京都の学者文化人との交流は、ある程度研究が進展しているが、彼がどのようにして日本伝存古写本や古刻本の情報を得たのか、またそれらに対してどのような調査を行ったのか。これらのことについては、明らかになっていない部分も多く、本研究では羅振玉を軸にこの時期の日本の、古写本古刻本の所蔵や、書誌学的研究について明らかにしようとした。加えて、羅振玉と彼の影印研究活動に影響を与えた日本の学術文化界の状況を明らかにしようとした。

### 3. 研究の方法

本研究は、日本に伝存する古写本について、明治から大正時期における発見とテキストとしての価値の発見の二つに分けて考察を行うこととした。またこの時期を博物局、印刷局による調査から楊守敬の日本滞在時期ごろまでを前半期とし、1911年の羅振玉の来日から帰国までを後半期として、それぞれの時期の古写本の発見者の違いや影印の目的の違いといった相違を手がかりに考察を進めることとした。

前半期の公的機関の調査、また後半期の流動にともなう個人の所蔵についても、それが古写本だけに限らず、所謂古美術を広く調査・所蔵の対象としていたため、美術・芸術史分野における研究が比較的豊富であった。本研究ではそれらの成果を利用し、その調査、所蔵者が、古写本(古刻本)をどのように位置付けていたかを明らかにしようとした。また古書店ばかりでなく、同時期の所謂古美術

商のオークション類を調査し、典籍についての情報を収集することとした。

博物館、印刷局の活動について、特に博物館局長であった町田久成の古典籍保存活動が、楊守敬の『日本訪書誌』に散見しており、それを中心的な資料として情報を集めることとした。

後半時期の羅振玉については、内藤湖南との交流に関して比較的多くの資料が残っているが、一方でこの時期に民間において発見された古写本古刻本等については、神田喜一郎が自身の神田家の蔵書も含め、随筆など様々な形で記録を残している。更には羅振玉の集書や調査についても筆記しており、これらについても神田喜一郎の著作を資料として、羅振玉の活動を整理することとした。もちろん羅振玉の日本伝存典籍に対する調査や論評は、影印書に附された彼自身の跋文に記されていることが多く、それらを解読することによって、彼の古写本古刻本についての情報収集と関心のありかたを解読することとした。

#### 4. 研究成果

本研究では、前半期において重要な活動をおこなった機関として博物館と印刷局に注目し、両者の古写本の発見に着目して考察を行った。特に印刷局については、「朝陽閣集古」と称される古写本影印シリーズが刊行された。このシリーズの内容や選択の基準、その刊行の学的意義について明らかにした。また後半期においては、「王勃集」巻 29 巻 30 発見の経緯に着目し、この時期、茶道を趣味とする財界人が茶道具の一つとして、古写本が収集していたことを明らかにし、書誌学を中心とする学术界とは別にこのような文化界があり、その二つの文化界のリンクの中で、古写本類のテキストとしての価値が発見されてきたことを論じた。この両時期の発見については、[雑誌論文] において発表した。その他、博物館局長町田久成に注目し、資料を収集し、彼の活動をまとめた。それについては、[学会発表] の 及び後に述べる澎湃新聞のインタビューにおいて紹介することが出来たが、専論としてまとめることができなかったことは、反省すべき点である。

本研究において後半期とした明治末から大正時期は、羅振玉を中心とし、彼の日本における古写本古刻本の影印活動と、それに対する書誌学的研究を跡づけようと試みた。彼のこのような活動については、[図書] 及び [ ] において、幾つかの論考を纏めることができた。また、[学会発表] の他、本研究期間中、中国において「羅振玉の日本所在中国典籍の影印活動について」(浙江省紹興市・浙江越秀外国語学院東方言語学院。2017年10月) また「關於日本伝下来的《王勃集》」(上海師範大学・中国古典学名家講座。2018年3月) と題して、それぞれ成果を発表する機会を得た。更に上海師範大学滞在中の3月、

上海・澎湃新聞のインタビューを受け、王勃集を中心とした日本古写本のテキストとしての価値や、その発見における楊守敬・羅振玉及び森立之・内藤湖南等の協力について紹介した(記事の題名は「訪談：道坂昭廣初唐的駢文、詩序与王勃之死」掲載は5月9日)。澎湃新聞はインターネット新聞であるため、記事掲載後、直ちに幾つかのサイトに転載された。これは概説的な内容であるが、本研究期間中に得た知見を総括し、紹介する内容となっており、専門家ばかりでなく、一般の中国の人々に対しても日本古写本について紹介できたことは、成果の発信という点から考えると、一定の意義を認めることができるであろう。

論考については、日本の古写本がもつテキストとしての価値については、『王勃集』を取り上げ、[雑誌論文] や[学会発表] などで報告した。また本研究では、羅振玉から徳富蘇峰にあてた手紙について分析を行った。羅振玉が日本に滞在していた時期に影印した典籍のなかに、蘇峰蔵書を借りて影印したものがある。それらについては蘇峰の蔵書であることが跋文に明記されているが、その影印に至る経緯について、必ずしも明らかではなかった。同志社大学附属図書館に所蔵されるこれら書簡群は、それら蘇峰蔵書を影印刊行するに至る彼との交渉を具体的に示しており、それぞれの影印書の跋文の内容を補う内容をもつ極めて貴重なものであった。考察の過程で、蘇峰の蔵書を保存する石川武美記念図書館成篁堂文庫に調査に赴き、同志社所蔵書簡群に欠落していた3通の手紙を発見するとともに、羅振玉より蘇峰に贈られた書籍に残された両者の筆記から、彼らの中国典籍を通じた交流について知見を得ることができた。

これまで両者の中国典籍についての交流は、『大唐三蔵取経詩話』のような特定の典籍についてしか注目されることがなかった。しかしこの書簡群により、羅振玉の関心が、蘇峰が所蔵する中国典籍全般にわたっていたことを明らかにした。本書簡は、羅振玉の日本での調査活動を具体的に示す資料として極めて貴重であるが、本科研期間中には、基本的な調査しか行えなかった。本科研での調査を基礎として、今後考察を進めてゆく予定である。

また、[雑誌論文] は、本科研の成果を展開し、日本伝存漢籍、特に文学がどのように受容されたかを考察したものであり、これもまた本科研で得られた知見に基づくものである。

本科研は概ね所期の成果を挙げることができたが、当初予定していた遼寧省図書館及び大連市図書館における羅振玉旧蔵書の調査は、不十分なまま研究期間が終了することになってしまい、成果を纏めることが出来なかった。このことも、反省点の一つとして報告しなければならない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7 件)

道坂 昭廣、日本に傳わる『王勃集』殘卷について—その書寫の形式と「華」字缺筆が意味すること—、『東方學』130、査読有 2015、1-17

道坂 昭廣、駢文という文体の日本への伝播について、『漢字漢文研究』10、査読有、2015、251-273

道坂 昭廣、關於正倉院《王勃詩序》之《秋日登洪府滕王閣餞別序》、『第一屆饒宗頤與華學國際學術研討會論文集』査読有、2016、373-385

道坂 昭廣、王勃南行考、『饒學與華學』下、査読有、2016、855-864

道坂 昭廣、「試論駢文在日本的傳播序論」、『駢文研究』1、査読有、2017、135-146

道坂 昭廣、有関保存於日本的《王勃集》殘卷景印劄記、『漢學與物質文化研究叢刊 3 心與物融』、査読有 2018、97-113

道坂昭廣、「羅振玉より徳富蘇峰への手紙 同志社大学図書館蔵『羅振玉書簡：徳富猪一郎宛』略注上」、『歴史文化社会論講座紀要』15、査読有、2018、37-51

[学会発表](計 7 件)

道坂 昭廣、「庾信以前・庾信以降—庾信の碑文を中心に—」、六朝学術学会第 19 回大会(二松学舎大学)、2015・6・20

道坂 昭廣、「羅振玉と日本」、五洲論壇(浙江工商大学東方言語文化学院)、2016・4・27

道坂 昭廣、「試論駢文在日本的傳播」、中国古代散文学会第十一屆年會暨國際學術研討會(中国桂林 廣西師範大学)、2016・9・3-4

道坂 昭廣、「日本に伝わる王勃集」、中国日语教学研究會浙皖贛分会 2016 年年會(南昌・江西師範大学)、2016・10・22

道坂昭廣、「關於日本傳存的《王勃集》殘卷 - 其書寫形式以及“華”字缺筆的意義 - 」、第二屆南京大學域外漢籍國際學術研討會(南京大學)、2017・7・1-2

道坂昭廣、「有關日本平安時代詩序簡介以《本朝文粹》所收詩序為中心」、『駢文國際學術研討會暨第五屆中国駢文学會年會(長沙市 湖南師範大学)、2017・7・8-9

道坂昭廣、「羅振玉と日本所在中国典籍(同志社大学図書館・徳富文書『羅振玉書簡：徳富猪一郎宛』の紹介を兼ねて)」、「浙江與東亞」國際學術研討會(浙江工商大学)、2017・10・29-30

[図書](計 2 件)

道坂 昭廣、北京大学出版社、京都大学附属図書館蔵羅氏蔵書目録上下、2015、237-250 (解説)

道坂 昭廣、研文出版、『王勃集』と王勃

文学研究、2016、388

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]  
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

道坂 昭廣(MICHISAKA, Akihiro)  
京都大学・大学院人間・環境学研究所・教授  
研究者番号：20209795

(2)研究分担者

(3)連携研究者

(4)研究協力者

( )